

---

# ひぐらしのなく頃に～皆守り編～

S

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃にて 震守り編

### 【ZPDF】

20712Y

### 【作者名】

S

### 【あらすじ】

鷹野と戦い敗れた梨花。

この世界で羽入は運命と戦う覚悟を決める。

そして、ここに運命と戦う為の最後の駒が揃つ。

最後の世界で最後の戦いが始まる。

## 一話 始まり（前書き）

こんにちわ～  
不定期更新で始まります。  
駄文ですがよろしくお願ひします。  
では、始まり～

## 一話 始まり

「……今まで良く頑張ったな」

とある家の玄関にて一人の少年が背中を向いている少年に尋ねた。  
尋ねた少年の目はまるで戦争に行く家族を送るような表情だ。

「ああ、守らないといけない人が居るから……」

「そうか……頑張れよ」

「ああ……そろそろ行くよ、弘輝」

その表情は本当に神々しく彼を止めることを許される人間はこの世には存在しないと言わしめる物だつた。

弘輝と呼ばれた少年はそれを分かつていてから「うう」と言つた。

「頑張れよ……陸」

陸と呼ばれた少年はそう言われてその家から外へ一歩踏み出した。

一週間程時間が戻り難見沢

「つー羽入ー今日はいつ?」

梨花が起きてまず言った言葉はそれだつた。

前の世界で鷹野に殺された記憶はある。

これで自分の前にある運命と言つ壁を壊せる可能性は高くなつた。

「今日は五月の二十九日なのです！」

先程までどこにも居なかつた所に角の生えた少女が現れた。  
彼女が羽入である。

梨花と共に百年間運命と戦つて来た相棒である。

「まだ三週間はあるのね……」

「はいーとこりで梨花。

僕は運命と戦つ為に実体化を行つのです」

それを聞いて梨花は驚いた。

実体化は羽入の中では禁術。

それを行うことは自分の神としての能力を捨て去ると書つことだ。

「あなたも運命と戦つ覚悟を決めたのね……」

それに羽入は静かに頷いた。

「分かつたわ。

どれくらいかかる?」

「分からぬのです。

でも、頑張るのですよ!」

「ええ、頑張りなさい」

その時一人は知らなかつた。

運命と戦う為の役者がもう一人ここに来ていると言つことを……

その駒こそ運命を打ち破る為の最高の駒だと言つことを……

## 一話 始まり（後書き）

さて、今回出て来た『陸』といつキャラですがひぐらしを裏の裏まで知っている

方なら知っている方が居るかもしません。  
では、また次回です。

11／03日修正しました。

## 一話 一人の転校生（前書き）

こんにちわ～

これからは物語の日にちが変わる毎に日にちを書きます。  
この方が物語の時間軸分かりやすいですからね。  
では、始まり～

## 一話 一人の転校生

六月六日

圭 SIDE

「眞さん、 今日は転校生を紹介します」

『おおおおおつー』

知恵先生がそう言ったことにより教室内のテンションが一気に上がった。

転校生が来るのは前から決まっていたことだ。

「それと転校生は一人です」

前から決まっていた転校生は一人だが急にもう一人転校生が出たのだろう。

だが、それでも俺達が歓迎するのは変わら無いけどな。

「では、入ってきてください！」

知恵先生がそう言つと転校生が扉を開ける。

ああ！ そんな不用心に扉を開けたら！

ビュンッ！

風を斬る様な音がしてボールが開けられたボールに向かって飛んで行く。

教室内に居た全員は転校生に当たることを予想しただけだ。

だが……

パシ！

『！？』

転校生はボールを取つたらしい。

「 下がつてろ」

良く聞き取れなかつたが転校生のもう一人の転校生の名前を呼んだ  
んだろう。

どうやらお互に知り合いの様だ。

入つて来たのは少年。

俺と同い年の位だろう。

転校生（これからは少年と記す）は足元を見る足元にはロープがあ  
つた。

その先に硯があつた。

「ふう……やつぱりお前を先に行かせてたらヤバかったよ。  
入つてきて良いよ。足元には注意して」

少年がそう言つと少女が入つて來た。  
めちゃくちゃ可愛い。

「あつう……緊張するのです……」

「ははっ、俺も少しは緊張してるよ」

少年はそう言つと生徒全員に向かつて自己紹介を始める。

「古代 陸です。

以後お見知りおきを」

そう言つて陸と名乗つた少年は頭を下げる。

すく 礼儀正しい少年だ。

自己紹介をした後陸は少女を前に出す。

少女に自己紹介しようと催促しているんだろう。

「あつうう……古手 羽入なのです……

梨花の遠縁の親戚なのです……

よろしきゅ……よろ……よろ……よろしきゅお願いしゅなのです……」

『おおおおおおおおつー』

羽入と名乗つた少女は名乗つてから陸の後に隠れた。  
知らない人よりも知り合いの方がやつぱり良いんだろう。

「皆さん、何か質問はありますか?」

「はいー。」

流石魅音、素早く手を上げる。

「二人は付き合つてるんですか?」

流石にからかつてやつてるんだろう。  
だが羽入の方は顔を赤らめている。

ପାତ୍ରିକା

その反応を見て陸の方は観念した様に言った。

「羽入は俺の嬪約者です」

はい?

咄闘を間違いだと思って咄闘を返す。

何故か隣は羽人の耳を塞いでござ  
が

「だから羽入は俺の婚約者です」

余談だけどこの日震度一の地震が離見沢で観測されたらしい。

「つまり一人共結婚の約束してるの？」

俺達が叫んでからしばらく一人は質問責めにあつていた。  
気の弱い羽入に代わつて殆んど陸が答えているが。

「まあね」

因みに先程陸はさつきから羽入以外には警護で話してたから魅音が『もう敬語で話すのやめなよ』と言つてタメ口にさせた。

「いつ結婚の約束したの？」

「秘密だよ」

人差し指を口の前に立てて教えないと言つ様な表情をしている。

「ええ～～！良いじゃんケチ～～！」

余程教えて欲しかったのか文句をブツブツ言つている。

「皆さん！そろそろ授業を始めましょう！」

知恵先生がそう言つて授業が始まつた。

陸SIDE

授業の内容は授業と言つよりも白黙だつた。  
確か……圭一（だつたか？）や知恵先生が生徒達に教えて回つてい  
る。

俺と言えば……

「だからな、羽入。

「こは……」

羽入の専属教師をしている。

昔羽入はもつと聰明だと思つていたんだがな……  
まあ、時間が流れれば人は変わるんだろう。  
俺も昔と比べれば相当変わつた。

「陸、こつちも手伝つてくれ！」

奥さんの勉強ばっかじゃなくてさー。」

「分かった。

じゃあ、俺は梨花さんと魅音さんを見るから。  
レナさんと沙都子さん頼めるか?」

「分かった!」

そう言って羽入に断りを入れてまず魅音の勉強を見る。  
そこで俺は固まってしまった。

「これ……中一の勉強じゃないか……」

さつき確か案内の時に知恵先生が

『この学校の生徒の中であなたともう一人同じ年の生徒が居ます。  
あなた達が一番田に最高学年ですからキッチンとしてくださいね』と  
言った。

つまり、俺より上の学年は三年や高校生となる。  
だが、この学校には高校生は居ない。

だから最高学年は中三になる。

魅音の身長からして彼女が最高学年だと推測出来るが……  
何でその彼女が中学校一年生の勉強をしているんだ……

「ははは～～～！私は本番でかつ飛ばすタイプだからね～！  
大丈夫だよ～～！それよりもうしたのかな～？こめかみを押された  
りして～」

「いっ……！」

一度現実を見せた方が良いか……

「次の文中で主人公が思ったこと喜怒哀楽の内の一つを答えろ。

『その街を歩いていて少した時だ。

私の仲間が道端に落ちている人形に歩み寄った。

恐らく戦争で亡くなつた子供の物だろう。

仲間はその人形を抱いて涙を流して謝つた。

『私達の起こした戦争の所為で……ごめんなさい』

その言葉を聞いて私も涙を流した』」

簡単な問題だ。

小学五年生の時に塾で出された問題。

これが分からなかつたらこいつは……

「怒」

小学生五年生以下だ！

「圭一！こいつは受験を諦めた方が良い！」

「えー？何でさー？」

「当たり前だろ！」

何で何で怒つたんだ！自分も涙を流してるだろ？がー！  
答えは哀だ！

これで『愛？』とか聞き直したら俺は……

「愛？」

「圭一……俺は頭が痛くなつた……

俺は別の人を教える……

俺はそう言ひながら頭を押されて梨花の所に歩いて近づいた。

「よひしべ……」

「よひしべお願いしますなのです。」

警戒してゐるな。

そんなことは隠してゐるけど。

一応俺が味方だつて言ひじとを教えておくか。

「どいが分からぬかな？」

「いじなのです」

「ああ、いじは……」

俺はそう言つてノートに解法を書く振りをしていつ書いた。

『惨劇のことは羽入から聞いた。

俺は味方だ。惨劇を打ち破る為に協力する。  
後で校舎裏で羽入を含めて話そつ』

それを見て梨花は少し驚いたような顔をしたが梨花はすぐに頷いた。

そして休み時間校舎裏

「それで？古城 陸。あなたは何者なの？

羽入の婚約者とか言つてるけどそんなことはありえないわ。

羽入は大昔から人には姿が見えない状態だったのだから

校舎裏に来て一番最初に梨花はそう言った。

「なあ、俺が大昔の人間だつて言つことは考へないのか？」

「あなたも羽入の様なものなの？」

「言つた通りのことだ」

俺の言葉に梨花は首を傾げた。

何を言つているのか分からなかつたのだろう。

今度は羽入がこう言つた。

「陸は僕の夫』古手 陸』の生まれ変わりなのです」

## 二話 大石刑事と陸の推理対決（前書き）

こんにちわ～

気が向いたので連続投稿です。

ちょっと大石さんの扱いが雑ですが気にしないで頂けると嬉しいです。

（大石ファンの方）めんなさい……

それと陸はゲームのキャラなのですが少しゲームのキャラから離れてますね……

相当黒いです。

では、始まりです。

## 二話 大石刑事と陸の推理対決

教室

羽入が俺の正体を言った後梨花はしばらく呆然としていた。  
そして一言『私を助けて』と言った。

俺はその言葉に梨花に抱きついて答えた。

「絶対に救わないとな……」

俺は誰にも聞こえない様にそう呟いた。  
俺は羽入を守るために力を付けた。

だけど、その力は羽入を守るためだけの力じゃない。  
目の前で助けを求めている人を救う為の力だ。

「陸、授業終わったよ！」

「え？」

見ると各々が帰る為の準備を始めていた。  
深く考え過ぎたか。

「俺帰るわ」

これ以上学校に居てもすることが無い。  
そう思つて席を立つた。

すると……

「ちょっと待つた！」

そつと聞いて俺の前に魅音は立ち止った。

「何だ？」

「陸には部活に参加してもいいよ。」

「部活？」

「何の部活だろ？」「少し気になる……」

「我が部はだな、複雑化する社会の中、活動毎に提案されるものがままな条件下、時には順境。あるいは逆境からいにかにして……」

恐らくそれは部活の域を超えていふと思つ。

社会だのなんだのは一介の中学生がどういひ出来る物ではない。

「つまり部活で遊んで楽しむ部活なのです」

さつとまでの演説の存在意義を説明してほしくなつた。

「さて、どうする？

因みに羽入は入るつてさ」

「羽入も？」

「あうう……」

羽入は顔を赤くしながら頷いた。

どうやら本当らしい。

羽入が入るなら入らない理由は無い。

「分かつた入る」

「言つとくけどひでの部活は勝つ為なら何でもやるよ。それにえげつない闘ゲームもあるしな」

「何でもか?」

「うふ。何でも」

魅音はそう言いながら一やけでいる。  
勝てる気満々のようだ。

だが、何でもやるなら勝つのは俺だ。  
俺を誘つたことを後悔させてやる。

「今日は、何をするんだ?」

「誰でも分かるジジ抜きだよ~」

「分かつた」

「あ、始めよ!」

「上がりだ

そう言つてカードを捨てる。  
これで俺の三連勝。

皆は田を丸くしている。

「そんな……わたくし達が勝てないなんて……」

「陸くんす」い……」

「陸、一体何をしたんだ……」

「この程度チヨロイな……」

「さて、次は『古代君、前原君、お密さんが来てますよ。昇降口に行つてください』分かりました！  
しうがないな……圭一、行くぞ」

「ああ、皆先に進めてくれ」

「うん、分かった」

俺達は昇降口に向かつて歩き出した。

昇降口

「んつふつふつふ~」んにしねわ。

興富署の大石と申します

警察か……俺ちよつと嫌いなんだよなあ……

「何の用ですか？」

あらかじめ言つておきますが職務質問や任意同行ならびにひきつけ拒否権がありますよ」

少しツンケンした言い方になつてしまつたが俺が言つていることは事実だ。

実際今まで警察絡みのことは法律の穴を潜つて避けて来た。

「少しお話をしますだけですよ。

なあに、取つて食いやしません」

「ちつ、面倒な奴だ……

「それより私の車に行きましょ。」

「ここは暑くて暑くて……

あ、でも私の車は冷房効き過ぎてますので寒かつたら言つてくださいね」

「こここの車に行つたら逃げ場が無くなるな……

ここは……

「いえ、ここで話しましょ。」

「それとも……」

俺はゆづくつと大石と名乗つた刑事に近寄つて立つた。

「この学校の誰かに聞かれたら不味いことを話すんですか？」

「つー」

効いてるな。

恐らく心の中では『嫌な奴だ』とでも思つてんだろ？  
主導権はこちら側にある。

このまま攻めさせてもいいぜ。

「あなたが話そつとしたのは雑見沢連續怪死事件のことでしょう？」

「お、おい一陸、何だよそれ！」

知らなかつたか。

まあ、俺も羽入から知らされたんだけどな。

「五年前この村にはダム建設計画があつてな。

村人は総出で反対したんだ。

それからしばらくなしてダム建設の所長が死んで、その主犯が一人消えた。

一年後には古手神社の……つまり梨花の父親が死んで、母親が消えた。

二年後にはダム賛成派の……沙都子の父親が死んで、母親が消えた。  
三年後には沙都子を虐待していた沙都子の『何で知ってるんですか

！？』『はい？』

「え？」

「俺はね『三年後沙都子を虐待していた叔父が興宮に行つた』そう  
言おつとしてたんですよ？」

地雷を踏んだな。

大石さん。

「つー」

「どうやら叔母が死んでいたようですね。

そして、北条悟史が行方不明になつたと。

圭一因みに全ての事件が綿流しつて言つてこの地独特のお祭りの日なんだよ

で？あなたは何を話そうとしているんですか？

『あくまで冷静に

主導権を握つたまま話を聞け。

じゃないと主導権を奪われる』

頭の中でそう言う命令が発令される。

その命令に逆らひつもりはない。

「私はその離見沢連續怪死事件の犯人を園崎家だと思つています。ですから『スパイをしろつてことですか？』つ！」

「園崎家は犯人じゃないですよ

「……何を証拠に？」

「まず一年目ですね。

これは簡単です。

犯人が主犯以外捕まつたことです。

何で捕まつたんでしょうね？

園崎家が犯人なら匿うでしょうね？

取り調べで『園崎家が犯人だ』なんて言われたら困りますから。次に一年目のダム賛成派の事件ですがこれはおかしいんですよ。だって、展望台から落としたんですよ。

もしかしたら奇跡的に助かるかもしれないじゃないですか。

そんな回りくどいことは普通しません。

園崎家ならば普通に一人殺し一人を崖から落とすでしょう。  
次に古手家の件の件ですがこれはこの村がオヤシロ様を狂信していることで解決できます。

この村では古手梨花をオヤシロ様の生まれ変わりとして崇めています。

その古手梨花は両親が居ません。

人間にとつてそれは相当の苦痛です。

例外もありますが彼女は今は少女です。

精神的につらいでしょう。

オヤシロ様の生まれ変わりである少女に苦痛を与える様なことをしますか？

四年目ですがこれもまたおかしいんですよ。

何で間に古手家が入つたんですか？

普通なら排除すべき北条家はさつさと排除するべきですがこの事件はそうではありませんでした。

さて、ここまで何か質問は？

長く喋つてから口が疲れた……

「あなたは一体何者ですか？」

「私は只の学生です。

行くぞ、圭一」

俺達は教室に向かつて歩き出した。

廊下

「なあ、本当に良かつたのか？」

教室に向かつ途中に圭一がそんなことを言い出した。

「園崎家が連續怪死事件を起こしてゐるって奴か？」

その問いに圭一は頷いた。

「なら、見ろよ」

丁度教室の扉の前に着いたので俺は扉を開いた。

そこには魅音達が楽しく笑つてゐる光景が広がつていた。

「魅音のあの笑顔を見てまだ彼女を疑つか？」

その問いに圭一は首を横に振つて見せた。

「なら良いじゃないか。

皆一帰つたぜ！」

「遅いよー早く早くー！」

「ほら圭一、行くぞ」

「応！」

俺は魅音達を絶対に疑わない。

そう……絶対にだ。

「うう……屈辱的ですわ……」

「俺が何でこんな恰好を……」

「……………恥ずかしょお……………」

ふ 照者の遠吠えが気持せ良いたれ  
る舌の音只ジド 吻只リ一太郎ジ 痘つ  
る

それで全員巫女服だ。

胸元に

正に勝者に与えられる最高の眺め！  
まあ、全部イカサマをして勝つなんだナゾな。

「陸、一体何したのさ……」「

「ばらしても俺の勝ちは揺るがない？」

それで俺が罰ゲームだ

か語れれるのには文には力

「……分かつたよ。

## 説明して

「分かつた」

俺は頷いてカードを捨て山の中から一枚カードを適当に捨つ。  
ダイヤのエースとクラブのエースだ。

俺はそれを見せる。

「覚えた？」

「うん」

俺はその返事を聞いてカードを裏返す。  
位置はえていない。

「ダイヤのエースを引いて」

「え？ 簡単だよそんなの」

魅音はそう言いながらカードに向かって手を伸ばす。  
そしてカードを抜いた。

そう……クラブのエースのカードを。

「えー？ 何でー？ おじさんはちゃんとダイヤのエースを……」

「ふつ、これが俺の技だよ」

そう言いながら俺は魅音からダイヤのエースを受け取り一枚のカードを表にして持つ。

「ネタばらしだ。

もう一度ダイヤのエースを抜いて」

「分かった

魅音は頷いて手を伸ばす。

そして今度はネタばらしだから分かりやすいようになります。

「あ！」

「気付いたか……

俺がしたのは簡単なこと。

相手がカードを抜く前にカードの位置を逆にしただけ。

「そんな……でもさ、それって一枚以上だときつがない？」

「そこには慣れ。

何回もやつてると上手くなるから」

そう言って俺は三枚カードを引いて見せる。

ダイヤの2、スペードのエース、クラブのジャックだ。

位置関係は右端からダイヤのエース、クラブのエース、スペードの

エース、ダイヤの2、クラブのジャックと言つ感じだ。

そして俺は指を上手く使ってダイヤのエースとクラブのエースの位置を上手くすり替えた。

「す、じ、い、す、じ、よ、陸君！」

「みい 多分陸は将来カジノ潰しつて呼ばれる様になるのです~」

「もう幾つか潰したよ~」

「「「はー?」「」」

「せり、圭一、トニー・リークにある（某カジノ店）って知ってるだろ？」

「三年前潰れた」

「ああ、会員なら子供も入れるんだよな。  
確かたつた一人の子供に潰されたって……まさかー。」

「ああ、俺会員でさー

暇つぶしに入つたら潰しちゃつた」

「俺は悪くない。

あそここのディーラーが弱いのが悪いんだ。

「　　」

「あ、やっぱー……

空気がおかしくなつた……

よしーここは羽入をからかうか。

「それより羽入！

「やっぱり似合ひじやないか！」

「……」

真面目にヤバイ。

頭の中で警鐘が鳴る。

でも、もう遅いだろ？

「やっぱり似合つ？

陸、あなたは私がこんなハレンチな服が似合つ様な服だと思つてい

たのですか？「

冷や汗が次から次へと流れで行く。

俺はゆっくりと後に下がる。

でも、それは逆に羽入の炎に油を注ぐ危険なことだって忘れていた。

「陸、ビビに行こうとしているのですか？」

ヤバイ……

危険だ……

皆！助けてくれ！

そつ念を送つて皆を見る。

「「「（ガクガクガクッ！）））」「「

皆震えてるね。

気持ちは分かる。

分かるけど……助けて？

「「「（ふるふるふるひーー）））」「「

うそ……皆助けてくれないの？

仲間じゃないの？

そんなことを思つている間にも羽入はゆっくりと近づいてくる。

「陸、何か言い残すことばは？」

くつ！

このままじゃ俺の命がやばい！

奥の手を使うしか……

くそ！

「羽入ー・愛してるー」

「え？」

「俺は羽入を愛してるー」

あ～言つてゐるこいつもさうづなく恥ずかしい……

「な、何を言つてゐるのですかもうボクもなのです……」

よしー何とかなつた！

「！」、今回だけなのですよ？  
今回だけ許してあげるのです……

そう言つて羽入は帰る準備を始める。  
それに俺のバックも持つてきてくれた。

「か、帰るぞ！羽入」

「はいなのです……」

俺がまいた種だけじやつぱり恥ずかしい……  
家に帰る間もずっと田を合わせられなかつた……

## 五話 陸と羽入と読音との邂逅

皆、陸だぜ！

皆知つてるとと思つけど俺は羽入の夫の生まれ変わりなんだ。  
だから俺には羽入の手料理を食べる権利があると思つんだ。  
でもな、何故か今俺は羽入と一緒にエンジエルモートとか言つファ  
ミレスで晩飯を食べてるんだ。

おかしくないか？俺達一緒に暮らしてるんだぜ？  
晩飯は普通手料理だろ？何でファミレスなんだ？  
鬱になりそうだ……

そしてその羽入はと言つと……

「あつ~…おいしいのです~！」

さつさから美味しそうにシュークリームを食べている。  
こいつ、こいつ太るんじやないか？  
でも、こいつの幸せそうな顔を見ると注意する気力が無くなるん  
だよなあ……

「あつ~」

ああ……ホント可愛い……

……はつ~危うくのまれるとこがだつた……

「羽入、そろそろここに来た理由を教えてくれないか？」

「あつ~」

「『あつ~』じゃない。

甘い物が食べられるからとか言つ理由だつたら……」

「だ、だつたら?」

「今夜は覚悟してもらわなきゃならぬ」

「あつ!――違つのです!――

「なら何だ?」

「『惨劇』絡みなのです」

羽入はそう言いながら真面目な顔をする。  
俺もその雰囲気に身構えた。

「魅音には実は双子の妹の詩音と言つ人が居ると言つのは説明した  
と思つのです」

「ああ、それで?」

「……詳しく聞かせろ」

羽入は俺の言葉に頷き説明を始めた。  
詩音は紗都子の兄である悟史に恋をした。  
だが、彼は北条家人間。  
それは許されぬ恋だつた。  
そんなんある口悟史は警察に叔母の事件の件で話を聞かれることにな  
る。

詩音は禁じられていても関わらず自らの身分を明かし悟史を守つた。

結果としては悟史は守られることになるが詩音は爪を三枚剥がされることになった。

ここは全ての世界で共通のこと。

ここからは世界によつて違つが詩音が惨劇の主人公の世界だとある口の部活で圭一がレナにぬいぐるみを渡してしまつ。

その時魅音に『魅音にはこんな可愛い物は似合わないよな…』と言つたらしい。

その言葉は魅音の心に大きな傷を作つてしまつた。

そして魅音はそれを詩音に相談する。

詩音はそう言う相手が居ることに嫉妬する。

その結果どんどん悟史への感情が暴走し園崎家に犯人が居ると思いつめ復讐を始める。

そして魅音、圭一、沙都子、梨花、村長、祖母を殺し最終的には自殺する。

そういう世界があつたらしい。

「成程……でもよ、そう言つことなら俺は接触する必要が無いんじやないか？」

その部活の時に圭一に人形を渡せつて言つて魅音にはあんまり浮かれるなつて言えば

詩音は惨劇の主人公にならないだろ」

「駄目なのです。前の世界ことなのですが……」

この前の世界では紗都子の意地悪な叔父が帰つて来て皆で協力して紗都子を救つたらしい。

その中には勿論詩音も含まれていたそつだ。

「成程な……奇跡は皆が信じないと起らなければいけないとか

「はい。惨劇も詩音が居ないと打ち破れないのです」

「で、ここに来て詩音に会うことにしてたと。甘い物を食べたかつただけじゃないんだな」

「当たり前のです！」

羽入はそう言つて胸を張つた。  
すると……

ガツシャアアアアツン！

そんな音が鳴つたので気になつて見てみると少女がオタク三人に囲まれていた。

「せつしゃのジーンズがベタベタなりー早く拭くにヨリ！」

その言葉で状況が理解できた。

どうやらあのウェイトレスにあのオタク共がわざと足を引っ掛けウエイトレスを転ばせデザートを股間にかけさせたと言つて訳か。  
成程……外道だ。

「あー陸ーあの子詩音なのです！」

「何？」

確かに見てみると魅音に良く似ている。

「羽入、手荒な真似をするけど怒らないでくれよ?」

「安心するのです。  
大丈夫なのですよ」

俺はその言葉を聞いてゆっくりとオタク共に向けて歩き出した。  
そして俺はオタクに声をかけた。

「おー、下郎」

「は? 何ものにやり!  
お前なんかに用はないにやり!..」

「まあ、俺の話聞けよ」

俺はそう言つてオタクの肩に右手の手の平を置く。

「しつこい奴にやり!

何度もお前に用はいだだだつ!..?」

「同士!..? お前!..? 同士に何をした!..?」

「ただ、握力を込めて握つてるだけだけビ?..?」

ただ俺の握力はボーリングの玉を握りつぶすくらいの力はあるけど  
な。

「同士のから離れろ!..?」

オタク……ああ！もうBで良い！

オタクBはそう言って殴りかかって来る。

俺は左の手の平で拳を受け止める。

勿論左手にも力を込める。

「いだだだだだっ！」

するとオタクCが動こうとしたのでそれを止める。

「動くな！動けばこのオタク二人の握っている場所を握り潰す！」

「つ！」

オタクCはその言葉を聞いて動かずに止まった。

俺は三人の忠告する。

「お前等、もうこの店に顔を見せるなよ？  
もし、俺がこの店に来てお前達の顔を見たら……」

俺はAとBを離していつ言った。

「コンドコソコロシテヤルカラナ？」

いつも喋り方は疲れるけど結構効果的だ。

「「「し、失礼しましたああああああっ！」」」

三人共一気に逃げて行つた。

ま、あの程度の奴等を追い払えない訳無いけどな。

「あの……」

「ん?」

声のした方を見ると詩音が呆然と俺を見ていた。  
俺は知らない様な感じを装つてこう言った。

「大丈夫か? みお……魅音じゃないな」

「え! ?」

やはり驚いているんだろう。

俺も見た限りでは髪しか違いが分からない。

「俺は古代 陸だ。

あそこで座つてるのが俺の婚約者の古手羽入。  
古手神社の古手梨花の遠縁の親戚だ」

「えっと、私は園崎詩音です」

ああ、違いが分かった。

声が若干こっちの方が高い。

本当に若干だけど。

「よろしく。

少し話さないか?」

「え?」

「北条悟史」

「！？」

その言葉に詩音は反応した。  
やつぱり詩音は語史が好きだったんだな。

「北条語史のことを話さないか？」

「……あなた何者ですか？」

「オヤシロ様が惨劇を食い止める為に使わした遣いだ」

「その反応は『ここつ何言つてるんだ？』見たいな田だつたけど当然だな。

「とりあえず話そつ。

あんたに取つても有益な話しがあるかもしれないぞ」

「はい。

分かりました。

話しへ聞かせてちゃんとした話しへ聞かせてくださいよ」

「ああ」

俺と羽入はそれからじつぱりくの時間をエンジンモードで過ごした。  
詩音と話しへする為に……

## 六話 陸と羽入と詩音との話

羽入から聞いた話だと詩音はこの時期園崎家が悟史を消したと思つてゐるらしい。

更に沙都子の所為で悟史は限界まで傷付けられたと思つてゐるらしい。

その二つの誤解を解かなければ惨劇は訪れてしまう。

ならば俺がその二つの誤解を解いて惨劇を訪れなによければ良い。

と言つたと俺達は詩音のバイトが終わるのを待つてゐる。

今は20・50詩音のバイトが終わるのが21・00。

後十分待つていれば良い。

「じつかし……羽入はそんなに甘い物が好きだつたか？」

確かに昔は甘い物を見ると嬉しそうな顔をしていたがここまでじゅ無かつた筈だ。

一体昔からの千年の間に羽入に何があつたんだろう？

少し気になる……

「甘い物が好きになつたのは陸の所為なのですよ？」

「俺の？」

なら羽入が太つたら俺の所為か？  
何とかしないと……

「陸の作る甘い物がおいし過ぎてその魅力に逆らえなくなつたので  
す」

「それでも太るから少しさは自重しろよ」

そう言いながら羽入の口に付いているクリームを取つてやる。羽入は少し顔を赤くしたが気にしない。

— あうう あうう あうう あうう あうう —

ああ 可愛い

何て言ひか 保護谷か

「何をしているんですか？」

「おつとすまん」

気が付かなかつた

備とした」とか……次から氣をつけなければな。

「座つてくれ」

俺は俺の向かい側の席を指す。

そして俺は語り出した。

「まず、何で俺が北条悟史を知っているかだ。

信じなくとも良いが俺は本当にオヤシロ様から真実を聞いた

詩音は『こいつは何を言つてこらんだ』と言つ様な顔をしているが構わずに俺は続ける。

「まずは確認事項だ。

まず一つ。

お前は北条悟史は園崎家が消したと思つてゐる

その質問に詩音は黙つて頷いた。  
どうやら他の世界と同じらしい。

「一つ皿、お前は北条悟史は北条沙都子が傷つけたと思つてゐる」

その解答は肯定の頷きだった。

ふむ……ならばそれでも良いだろ？

一つの誤解を消してやる。

まずは園崎家の方だ。

これは大石に説明したことを説明すれば良いだろ？  
大石に説明したことを話した。

「……なら悟史君はどうして行つたの？」

これは知りたいだろ？

当たり前だ。

自分の好きな奴が行方不明になつたら行方を知りたくなる。

「答えてやる。

必ず会わせてやる」

「陸ー？」

羽入は驚いた顔をしている。

恐らく『東京』の件だろ？

「大丈夫だ。何とかする」

俺の真剣な顔に羽入は結局折ってくれた。

「……分かったのです」

渋々だが羽入は頷いてくれた。

俺は羽入の返事を聞いて詩音に向き直った。

「紗都子の件を聞いてくれるな？」

「……はい」

その返事を聞いて俺は語り始めた。

「詩音、お前は紗都子が悟史を傷つけたと思っているがそんな無い。それにもしそうだったとしても紗都子はその罪に気付いている筈だ」

「そんなことありません！」

その声に周りの皆は詩音に視線を向ける。  
俺は詩音に座る様に手で催促する。

「あの子は罪に気付かずのうのうと生きてるんです。  
なのに何で気付いていると思つですか？」

声に若干怒氣が混じつているがあまり怖くない。

「なら紗都子に会いに行くか？」

「え？」

この件は一人が解決するべきだ。

「彼女と会って話をしる。

そうすればお互い思つてることを話せるだろ？」

「……そうですね、なら明日の放課後に分校に行きます

「分かった。

それと悟史の件だが明後日だ。

良いな？」

「はい、分かりました」

そうして俺達は解散して各自自分の家に帰つて行つた。

陸の家

今は夜中の1：00。

羽入は一階の俺の部屋で寝ている。

俺は一階の電話でとある場所にかけている。

「弘輝か？」

『どうした？ 陸

「入江機関、知つてるだろ？」

『ああ、ちょっと待つてろ』

弘輝がそつ言うと保留音が鳴る。

それから一分弱でその音が止んで弘輝の声が聞こえた。

『良いか？メモ取れよ』

「ああ」

そつ言われて俺はメモの用意をする。

『行くぞ、入江機関は離見沢症候群を研究、ならびに治療の方法を見つける為の機関だ。

少し前までは軍事利用も考えられてたけど小泉つてお偉いさんが死んだ所為で軍事利用はされなくなつちまつたらしい。

元々離見沢症候群自体が危険な病つてことで研究を反対されてたけど小泉は反対派の声を抑えてたらしい』

「つまりあれか？小泉は入江機関のパトロンだつたのか？」

『ああ、実は入江機関の中に鷹野つて奴が居てそいつと個人的交流があつたらしい』

「そつか、分かった」

メモを取るのが大変だつた……

「それと入江機関に圧力をかけて欲しいんだが……」

『おう、良いぞ。

どんな風にかければ良いんだ？』

「『一瞬で潰されたく無かつたら村人のとある一人の住人を北条悟史に会わせる。』

無論俺も同行させる』

『北条悟史つて確か治療薬の検体だろ?』

「ああ、色々あつてな。

明後日だ」

『了解。

圧力かけとく。

お休み~』

「ああ

俺はそう言つて受話器を置いた。本当に持つべきなのは良い友だ。

「さてと……寝るかな

もう眠くなつてきた……

俺は一階に上がつて羽入の顔を見ながら眠つた。

第三者視点

入江機関

「どうすれば……

入江は悩んでいた。

その原因は先程東京からかかってきた一本の電話だった。

『今すぐあなたの機関を潰されたくなかったらある一人の住人を北条悟史に会わせろ。

その地に居る一人の男も同行する。日時は明後日だ』

まさか、東京がこんな電話を寄こすとは彼は思っていなかつた。この研究は完全に秘密裏で行われている。

それを東京が敗れと言つたのだ。

しかも命令からして断ればこの診療所は潰される。  
もしそうなつたら……

「悟史君……沙都子ちゃん……」

難見沢症候群で苦しんでいる一人が最悪の死に方をしてしまつ。それだけは避けなくてはならない。

「受けよう……」

それが彼女達の為になる……

入江はそう考へ目の前に居る悟史の病室のガラスに手を付けた。

## 話 卒業と沙都トトの邂逅

六月七日

今は授業が終わり放課後。

詩音が来るまで皆を待たせている。

「ねえ、陸。

一体何で皆を待たせてるの？」

これで魅音からこの質問は十回目。

「何度も言わせんって……

待つてれば分かるって言つてるだろ？」

いつ言つても魅音は飽きず質問していく。

実は俺はさつきから汗を搔いている。

詩音が何をしだすか分からぬ。

「はあ……」

それにも遅い……

もう十分は待つてる。

何かあったのか？

そんなことを思つてこると……

「来たか……」

「えー？」

「みいちゃん！？」

「魅音！？」

「魅音さん！？」

詩音が来た。

詩音は一人男を連れていた。

その男を見て俺は荒事に慣れている様な男。  
顔にサングラスをかけている為目は見えないが恐らくそのサングラスを外せば  
鋭い目が見えるだろう。

「詩音！？何でここに！？」

魅音はいつも詩音に近づいていた。  
それを俺は言葉で遮った。

「俺が呼んだんだ」

「どうして？」

「その人はオヤシロ様の遣いらしいですよ」

「冗談で言つたのに真顔で言われたら否定できないじゃないか。  
実際はオヤシロ様の夫だし……

「良く来たな、詩音。

でも、後の人は誰だ？」

俺がそう聞くと大男は頭を下げてお辞儀をする。

「葛西辰由と申します。  
詩音さんの付き人です」

葛西辰由?どこかで聞いた様な……まさか!

「散弾銃の辰一!？」

散弾銃の扱いにおいてはまさに右に出る者はいないと謳われた伝説の男!?

園崎組に所属しているとは聞いていたが……実際に会えるとは……

「もつ現役は引退しています。  
お忘れください」

「は、はい。  
古代 陸と申します」

俺はそう言つて礼をする。  
危うく呑まれるところだつたぜ……

「で、陸さん。

この子が沙都子ちゃんですか?」

詩音は紗都子の近くに居た。

俺はさりげなくを装つて紗都子の後に移動する。  
それと同時に葛西さんも詩音の後に移動していった。  
やはりこの男は本物だ!  
殺気が痛い……!

「ああ、やうだよ。

紗都子、じゅりやは魅音の双子の妹さんの園崎詩音さんだ」

「は、始めましてですわ

そつ言つて沙都子は戸惑いながらもお辞儀をする。

俺はと言つと詩音が武器を持っているかどうか探つていた。

詩音はナイフを持つて葛西は拳銃を一丁持つている様だ。

俺は丸腰なんだけどな……

ま、しようがないか……

「回りくどいのは嫌いなんで单刀直入に聞きますね」

詩音がそつ言つと周りの空気は本当に重い物になった。

そして、その空気の中詩音はこつ言つた。

「悟史君が消えたのはあなたの所為だつて分かつてます?」

詩音がそつ言つた瞬間圭一達が何か言おうとしたが俺は田でそれを制した。

この場は詩音と沙都子が解決するべきだ。

だが、詩音が沙都子に何かをしようとした時は……勿論容赦しない。そんなことを思つてみると紗都子は一度少しだけ目を瞑つて微笑つた。

答えた。

「はい、分かつてしますわ

「え?」

詩音は俺の言つていたことを信じていなかつたんだろう。

驚いた顔をしている。

「私はにいーにいーの後でずっと隠れていきました。

それがにいーにいーのことを傷つけていた……

それは気付いていました。

だから……あなたがもし、私のことを恨んで殺したいと言つんなら

……

何の抵抗もいたしません」

その顔は覚悟を決めた表情だった。

沙都子は俺の方を向き田で俺に指示をした。

『私を守らないで』

本当にやつしたのか分からない。

だけど……俺の頭の中でやつした沙都子の声が聞こえた。  
そんな気がした。

でも……

「詩音、沙都子を殺したら俺はお前を殺すぞ」

「陸さん!？」

「沙都子、思い出してみる。

お前の兄貴は優しかったんじゃないのか?」

俺は羽入から悟史の優しさを聞いて知ったんだ。

悟史が本当に沙都子のことを大切に思っていたことも……

そんな悟史が大切にしていた沙都子を傷つける奴は絶対に許さない!

「詩音、悟史は消える前にお前に『沙都子の』ことを頼む』って言ったんじゃないのか？」

お前は頼まれてたのに沙都子を傷つけるのか…？  
傷つけると言つんなら俺を殺してからにしろ…」

「うわあああつ！」

詩音は叫びながら隠していたナイフを取りそのナイフを俺に向かって斬りかかった。

だがそのナイフは俺に届かなかった。

「やめましょ、詩音さん」

止めたのは詩音の付き人、葛西辰由。

葛西は手の平でナイフの刃を握っていた。  
その手からは血が次々と流れ出ている。

「か……せ……い？」

「この少年は守ると決めたら絶対に守ります。  
彼が守る時で戦う時は私ですら勝てません」

「……あなたもす」い意志の持ち主ですね。  
出来ればあなたとは戦いたくありません」

「ふつ……詩音さんは私が説得しましょ。  
失礼します」

葛西は血が流れていな方の手で詩音を引き摺つて出て行つた。

「す、じい奴だ……」

俺はそう呟きながら葛西の出て行った出口を見ていた。

## 八話 仲良し？姉妹

六月八日

どうしてこうなったんだろうな？

俺は確かにこうなることを望んだぜ？

でもさ、物事には行き過ぎつてこともあると思つたんだ……  
え？何のことか分からない？

なら、見てくれ。

俺が頭を抱える理由が一瞬で分かるや。

「嫌ですわ——！」

「沙都子……ちゃんと南瓜を食べないとけませるよ……」

「いつ言つことだ……」

今は昼飯時。

何故かいきなり詩音が来て沙都子の前に重箱（いん） 沙都子の嫌いな野菜）を沙都子の前に置き

『悟史君からあなたことを頼まれています。  
なのでまづは好き嫌いから』

とか言つて無理矢理野菜を食べさせている。  
見ていて少し可哀想だがまあ、良いだろ？  
詩音は沙都子の為を思つてるので誰も詩音を止めない。  
若干何名か（部活メンバー殆んど）は面白そうに沙都子を見ている  
が放つておく。

「 読書、一昨日の約束忘れてないよな? 」

「 はー、当たり前ですか 」

悟史の」とせ口止めしている。

もし、言えば沙都子も会いたいと聞こ出すだろ。

それは流石に不味いからな。

「 わーと、やるやる弁当の時間も終わりだ。  
部活だー野郎共ー 」

「 うーうーうーうーうー 」

案外アドリブでもつこてきてくれるんだな。

校庭

「 今日は鬼! 」 ひーだよー 」

「 虞ー絶対勝つやるぜー 」

「 俺が鬼だったら圭一は絶対負けるやしない

「 何をー 」

「 良い雰囲気じゃん? 」

「 ほりじやんさんするよー 」

「 「 「 最初はグー！じゃんけんポン！」 「

各自出した手はこうなった。

俺グー

羽入グー

魅音グー

沙都子チョキ

梨花グー

レナグー

特別参加の詩音グー

「見事に沙都子が負けたな」

一瞬で沙都子が負けるとは……

「不祥」の北条沙都子が鬼を務めさせていただきますわ……

ホントに悔しそうに言う沙都子。  
少し可哀想だがしようがない。

「やつぱり鬼が追いかけるのは百数えてからにする？」

「いや、それだと偶にズルをする奴が居るから俺の問題を解いてか

らだ。

『ある事故現場で一人の少年が血を流し倒れていた。  
現場には次の三つが落ちていた。

アルバム

手帳

カメラ

少年は事故で死んだか？それとも殺されたか？』

答えは梨花に教え梨花は沙都子が答えてから百秒間は捕まらない。  
無論百秒間の間梨花を追いかけることは禁止だ』

俺は梨花に答えを教えて離れた。

そして

「始め！」

その魅音の合図と共に各自散らばって行く。  
そんな時圭一が俺の近くに寄つて来た。

「お前つて案外酷いのな……

「何がだ？」

「問題文の最初で『事故現場』って言つてだろ？  
殺されたなら殺人現場だ」

「流石」 そう言つこつた。

大抵は現場に落ちている物から解こつとするけどそんな思考じゃ解  
けない問題だ』

そんなやり取りをしていると

「陸さん！騙しましたわね！」

そんな声が聞こえる。

恐らく問題を解いたんだろう。必死に俺を追いかけてくる。

「騙された恨みを……

まあ、良いか……

圭一、ん？おー…どーに行く…

「わひばー…

くそー圭一を囮にする作戦が行えない！

ならば！

「えー何をする気ですのー…ひちに向かってくるなんて！」

そう、俺は沙都子に向かって走り出したんだ。

人には奇襲をかけられてから何秒間か対応出来ない時間がある。それは米軍兵士で平均十五秒。

その時間は如何に訓練しても零にはならない！

更に沙都子は兵士ではない。

部活メンバーの中でも彼女はトラップを得意とする。体育会系では無く頭脳で攻める方！

そこから計算して五秒だ。

今から五秒以内に……

「ちゅつー止まりなわこませー…」

一秒……

「た、タツチしますわよー！」

一秒……

「ちょーそろそろ不味いですわー！」

三秒……

「ひ、ひいっ！」

四秒……

「ぶつかりますわ！」

五秒！

俺は脚に全力を込めて一気に跳んだ。

そして着地地点は沙都子の後。

いくら紗都子であっても今の一瞬で通り過ぎた場所にはトラップが仕掛けられない！

「じゃあなー沙都子！」

俺はそう言しながら沙都子から離れて行つた。

「きいいいいっ！絶対に捕まえますわー！」

そんな宣戦布告を受けながら。

「ふう…… やで、 既にしているかな？」

俺は校舎の屋上に隠れていた。  
見ると皆俺を探している。

「既捕まつたか……」

俺は腕時計を見る。

「後十分……」

ある意味命がけだ。

負けたら相当恥ずかしい格好をして下校しなければならない。  
それだけは避けたい。

「ふむ…… 後七分」

考えごとをしている間に二分経った。

ここも長くは持たない。

そう思つて降りると……

「あー陸君！」

「レナー！」

しまつた……！見つかった！

レナに紗都子と同じことをするのは危険だ。  
下手をすれば俺の脚がレナの顔に直撃する。

そう思つて、俺はレナとは逆の方向に逃げる……が。

「見つけた！」

「圭一まで！」

挟まれた……！  
こうなつては……  
全力を出すしかない！  
俺は屋上に登る。

「レナ！挟み撃ちだ！」

「うんー！」

レナと圭一も屋上に上がつて來た。  
どうやら俺は屋上で時間を稼ごうと思つていてると推測したらしい。  
それはそうだろつ。  
いくら低いとは言え屋上から飛び降りれば怪我をする。  
だが、それは常人の話だ。  
俺は常人じやない！

「うおおおおおおおつー！」

「なー！マジかよー！レナ逃がすなー！」

「う、うんー！」

俺は校庭に向かつて跳んだ。  
だが、万事休すとはこの事。

跳んだ先には魅音達が居た。

「陸、終わりだよ」

「私達の勝ちですわ」

「みい 僕の勝ちなのです」

「梨花けやま、さりげなく活躍を自分だけの物にしてしまってますね」

「もう言ひとなら僕の負けでもあるのですよ」

「ふつ、そう言ひとか……」

「魅音、お前、圭一が一週間行方不明になつてそれからいきなり『これは圭一の遺骨だ』とか言われて骨を置かれたらどうする?」

「信じないね。この目で見た物が眞実とは限らないから」

「そうだな……それが正しい解答だー!」

俺はそつと羽入の方に走る。

「何をしてますのー?自分からー!」

「羽入は良い嫁だつてことを証明するのやー!」

「「「はあ?」」

その場に居た全員が意味が分からず首を傾げたが俺には分かった！つまりこいつ言うことだ！

「だらあつー！」

俺は羽入を拾い上げた。

そして梨花も回収。

「二人共！落とされない様にしてるよー！」

「はいなのですー！」

「ちよーどつまひー」とですのー。」

「分かりたいなら俺を捕まえろー！」

皆、分かつたか？

ヒントは俺が屋上から飛び下りてから皆が発した台詞にあるぜ。

解答は次回だ！

## 九話 勝つた理由

「「「負けたあ～～～！」」」

そう言って倒れ込む五人。

結果的に俺は勝った。

まあ、身体能力が違うからな。

そんなことを思つていると沙都子が悔しそうな顔をしながら俺に尋ねて來た。

「羽入さんと梨花は鬼では無かつたんですね？」

その五人共その問いの答えが知りたいのだろう。

皆俺の方を見ている。

俺は羽入の頭を撫でながら答えた。

「魅音、俺の質問覚えてるか？」

俺がそう聞くと魅音は『何だっけ？』と首を傾げた。

こいつは遊びのことしか頭に無いらしい。

二十分前のこと忘れているのは相当重症だ。

「俺は『圭一が一週間行方不明になつてそれからいきいなり

『これは圭一の遺骨だ』とか言われて骨を置かれたらどうする？』

と聞いたんだ

「ああ、そうだったね」

「すっかり忘れてたよ～」と言しながら魅音は頭を搔いた。

本当にここには駄目かもしね。

「羽入と梨花は鬼のふりをしてたんだよ」

「「「はああああつ！？」」

五人の叫び声が鳴り響いた。

まあ、そうなることは最初から予想はしていた。  
まさか二人が鬼のふりをしていたなんて思わなかつたんだろう。  
俺は驚いている表情を浮かべて、いる皆を見ながら説明を始めた。

「俺が屋上から飛び降りた後の羽入と梨花のセリフを思い出してみろ」

「確かに梨花ちゃんが『みい 僕の勝ちなのです』だよな？」

「羽入さんは『そつまつ』となら僕の勝ちでもあるのですよ』でした  
がそれが……あ！」

沙都子は気付いたか。

流石トラップの名人と言つたところだな。

羽入と梨花の仕掛けたトラップを見抜いたか。

「何だよ？ 一体何なんだ？」

圭一と魅音と詩音とレナは気付いていないらしい。

俺は少しヒントをあげた方が良いかなと思つてこいつ言つた。

「あの状況はお前達鬼の勝ちだった。

だからあの状況では『私達の勝ちだ』そつまつべきだ。

なのに羽入と梨花は『私の勝ちだ』と言つたんだ

分かりにくかつたかな?  
でも、分かるだろ。

「あー分かつたぜ!」

「レナも分かつた!」

そう言つて二人は嬉しそうにハイタッチをする。  
これで分かつていなのは魅音と詩音だけ。  
時間の関係でもう待てない。

「締め切りだあ～」

「「分からなかつた～～～！」」

二人はそう言いながら悔しそうな顔をして地面を叩く。  
こいつ等そんなに悔しかつたのか?

「正解は!『羽入と梨花が鬼のふりをしていた』でした」

「「ああ～そう言つことか～」」

二人は納得した様な表情をした。  
まあ、納得してくれないと自分のヒントを出す才能を疑うといふだ  
つたぜ。

まあ、そんなことより……

「皆、罰ゲームの準備は良いか?」

「 「 「 ギクッ...」 」

「 ひつやから逃げらると想つて いたらしい。」  
「 こつ等やつぱりバカだ。」

「 あ～て、罰ゲームを楽しもつかあ～？」

「 あやあああああつー助けてええええつー...」 」

その後罰ゲームとして『メイド服着用で校長先生の頭を撫でる』と  
言ひ罰ゲームをした時は仲良く包帯をして帰った。

## 十話 迷い

六月八日

今日は入江機関に行かなければいけない日。  
詩音と約束したからしじょうがないと言えばしじょうがないだろ。  
それでも緊張してしまう。  
羽入もステルスマード（俺と梨花以外見えないから俺が名づけた）  
でついてくるらしい。  
その羽入も緊張して……

「あつ……分からぬのです……」

緊張して……

「ううはううすれば良いんだよ、羽入ちゃん」

「あつー分かったのです！」

緊張……

「違つけど可愛いくおおおあつーお持ち帰りいいくつー。」

「あつー？陸！助けて欲しいのですうううつー。」

……

「緊張してねえじやねえかー。」

ガラツ！（俺が席を立つ音）

ビュンツ！（音速の速さでレナに近づく音）

パンツ！（レナの首に手刀を当てる音）

バタ……（レナが羽入ごと倒れる音）

文章で説明すると俺は叫びながら席を立つて音速の速さでレナの傍に移動。

そして、レナの首に手刀をくらわせ氣絶させた。  
でも、レナは羽入を抱きかかえていたので羽入はレナの下敷きになっていた。

「ごめんな、羽入。大丈夫か？」

俺は羽入を助けながらそう尋ねた。

羽入は少し怒っているのか口を尖らせてている。

「全く……もうちょっと良い助け方は無かつたのですか？」

「ごめんごめん」

羽入は元の口調に戻っているがまあ、大丈夫だらう。

皆気にして無いし。

つてか授業中に俺達は良くこんなに暴れられるよな……

キーンコーンカーンコーン

授業終了の合図が鳴り響き寝ていた魅音が起きて魅音が授業の終わ

りの号令をする。

勉強してないから黒鹿だと思われるんだとあいつは自覚が無いのか？

「まあ、這一辺活の時間だよ。」

ああ、この詫問の時間は樂しきが死んでんだけどな  
さて……今日はどんなイカサマをしようかな？

## 部活終了後の罰ゲーム時間

「はああつ！」

「ふんぬ！」

ドゴオオオツン！

俺は今校長先生と戦っている。

今田の部活は人生ゲームだつた。

そして運悪く負けてしまったのだ。

てしまつた。

頭を撫でられたが校長先生がマジギレしていると言う訳だ。

俺とやりあえるとか校長先生はどうして修行してたんだ？

「中々やつおるの……今の童にしては強い」

「五歳の頃から修行してたんでね」

俺の修行が始まったのは五歳の頃。

そつ……『あいつ』に親を……殺された時からだ。

俺は『あいつ』に復讐する為に強くなつたんだ。

羽入のことを思い出したのは修行している最中。

俺が十歳の頃だ。

ある夢を見て思い出したんだ。

羽入は多分『復讐なんてやめるのです!』って言つかもしれないけど

俺は復讐を達成する。

それが俺が強くなつた理由だから……

「……迷つておる」

「え?」

「お主の事は迷つておる。

自分の目的を果たすべきか、否かを

「……」

「良く考えるが良い。

お主の本当の目的を。

お主が強くなつた本当の理由を

校長先生はそう言つて校長室へと戻つて行つた。

「迷つてる、か……」

迷っている筈が無い。  
でも、何だろう。  
何で……

「こんなに胸が騒いでるんだろう……」「……

俺は校長先生の言つ通り迷つていいんだろうか……

「陸？どうかしたのですか？」

「あ、ああ、何でも無いよ」

いつの間にか俺の傍に居た羽入の頭を撫でながら俺はそう答えた。  
他の皆もいつの間にか近づいていた。  
皆に心配はかけられない。  
だから、俺は嘘をついた。

「さて、俺は帰るよ。

詩音、待ち合わせ場所は入江診療所だ。

忘れるなよ？」

「は、はい」

俺はその返事を聞いて羽入と一緒に帰つて行った。

## 十一話 入江診療所にて……

俺は今詩音との約束を果たす為に入江診療所の前に居る。何かが起きた時の為に一応銃は持つて来た。

羽入もステルスマードでついてきている。

「ふう……」

俺は溜め息をついて空を見た。

これから何が合つてもこの空は蒼いままだ。  
そつあの時も……蒼かつた……

『母さん！父さん！』

『陸！逃げろ！ぐわあああつ！』

『陸！言ひ通りに……あやあああつ！』

『父さん！母さん！何で……！んな！と……！』

「つー」

昔のことを思い出して顔を顰めてしまつ。  
それを見て羽入はこう尋ねた。

『陸、大丈夫なのですか？』

恐らく不安にさせてしまったんだろう。

羽入はそう言う表情を読み取るのが上手いからな。

「大丈夫だよ」

何とか微笑んで返すことは出来た。  
羽入は心配性だから微笑んで返さないと妙に勘ぐられる。  
羽入に心配だけはかけたくない。

「陸さん」

羽入と話していたらいつの間にか来ていた詩音に声をかけられた。

「詩音、心の準備は良いか？」

俺がそう言つと詩音は静かに頷いた。  
それを見て俺は入江診療所の扉を開く。  
今日は入江診療所は臨時休業になつていて。  
だから今日入江診療所にはスタッフ以外人は居ない。  
だから入江機関の方に入つても問題ない。

扉を開けて入ると前に入江診療所所长 入江京介が居た。

「詩音さんー？」

入江は詩音を見て驚いた顔をした。

確か詩音は『離見沢ファイターズ』って言つ草野球チームのマネージャーだったから入江と詩音は知り合いだつたんだな。

「入江さん驚いているところを悪いが北条悟史の所に連れて行つてもらえないでしょうか？」

「そ、そうですね。」ちらへどうぞ

入江はそつ返事をすると俺達を先導し始める。

そしてある一室に着いた。

その部屋はガラスで仕切られた集中医療室の様な部屋。

そして、ガラスの向こうには……

「悟史君……」

そつ……ガラスの向こうには去年行方不明になつた北条悟史が居た。彼の腕や足には拘束用の革やら色々な拘束具が巻き付けられていた。

「入江さん、北条悟史の現状説明を希望します」

「……分かりました。少々長くなりますがご了承ください」

入江の話はまず離見沢症候群の説明から始ました。次に悟史が離見沢症候群の末期になつてしまつたこと。去年からあの状態だと言つこと。もし起こしたらどうなるか分からないと言つこと。そして……治るのか分からないと言つこと。

「そんな……じゃあ、悟史君はもう私の頭を撫でてくれないの？ もう『もう』って言つてくれないの？」

嘘……何で……何で……？

詩音はそこまで言つと泣き崩れてしまつ。

よつやく会えたと思つたらいきなり『もしかしたらもう起きないかもしねない』

そう言われたショックは測りきれないだらつ。

死んだのならばまだ諦められる。  
死は人に平等に訪れる物だから。

でも、これは……余りにも酷過ぎる。

これは『もしかしたら起きるかもしれない』と言つ希望を持てる。  
いや、持ててしまつ。

もし彼が起きなかつたら詩音はそんな希望を抱きながら何年も何年  
も生きていかなければならぬ。これ以上の拷問はこの世に存在し  
ないだろう。

そんな拷問を何故彼女達が受けなければならないのか。

彼女達が何をしたんだろう?

彼女達の罪は何なのだろう?

彼女達はただ幸せに暮らしたかつただけなのだ。

それなのに何とこれは酷なのだろう……

そう思つた時俺は悟史の病室の扉に近づいていた。

「陸さん?」

「……詩音、今から悟史を起こす

「……？」

俺がそう言つた瞬間その場に居た全員が驚愕の表情を浮かべた。  
俺が今から行つ行為は悟史の心に負担をかけてしまう行為。  
それに悟史は見る物全てを敵とみなしてしまう。  
それでも俺は……彼女達の為にやらなければいけないんだ。

「古代さん! 彼を起こせばあなたが危険な目にあうんですよ! それ  
でも『良いんです』え?」

「彼が帰つて来るのを待つて居る子達が居るんですよ。

俺はその一人の為に何かしてあげたい

俺はそう言つてバスコードをつちはじめる。

古代 陸 陸将

指紋コード \* \* \* \* \* \* \* \* 認証

指紋コード \* \* \* \* \* \* \* \* 認証

ピー

そんな電子音が鳴つて扉が開く。

そして俺は部屋に入る。

部屋に入った俺は慎重にベットに近づき拘束具を外していく。  
その行為を羽入は何も言わずに見ていてくれた。

「羽入、外に出て見ていてくれ。

俺の戦いを」

羽入に見ていると言つても羽入は首を横に振る。

だからこそ、『外で見ていろ』と言つたのだ。

羽入は頷いて部屋の外に行つた。

そして俺は離れて

「起きろー・北条悟史ー!」

そう怒鳴つた。

すると悟史の体がピクンと動いた

「……起きたか

悟史はゆっくりと体を起こす。

見えた顔は誰も信頼していないような顔だった。

「さて……どうなるか……

鬼が出るか蛇が出るか……

「……

悟史は何も言わない。

ただ俺を見ているだけだ。

「さあ、始めようぜ。

北条悟史、お前の疑心暗鬼をぶつ壊してやるよ

俺はそう言つて拳を構えた。

悟史はそれを見て襲い掛つて来る。

その拳を見て俺が思つたことは……速い。

悟史はここまで速い拳を繰り出せるのか?

そう思う程だ。

でも……悟史は戦闘経験が無いに等しい筈だ。

こつちは戦闘が本職の人間。

怪我をさせずに取り押されることは容易い筈だ。

そう思つている間にも悟史の拳が飛んでくる。

俺は拳の勢いを使って一本背負いをする。

悟史は上手く受身を取り衝撃を減らした。

相当上手く投げたから受身が取りやすかつたんだな。

「本気を出す訳にはなあ……おい！悟史！」

俺が悟史を呼んでもお構いなしに悟史は攻撃を続ける。

「聞く耳もたずか？まあ、良いや。

聞けよ、今この村はお前達を迫害している。

俺がそれを解いてやる。

お前を虐待していた叔母も居ない。

叔父はまだ居るけどもし来たら俺が守つてやる。

絶対に裏切らない。

お前を殺そうとしている奴は居ない。

お前を傷つけようとしている奴は居ない。

居るのは頼もしい……仲間だ」

「……僕は

「ん？」

「僕は許されても良いのかな？

叔母を殺した僕が……幸せを願つても良いのかな？」

何だ……そんなことで悩んでたのか。

こいつは帰つて来れなかつたんじやない。

帰ろうとしなかつたんだ。

自分は人を殺したから罪深い人間だと決めつけて……

だから、幸せになろうと思わなかつたんだ。

ホント……勘違いも甚だしいぜ。

「良いんだよ、お前が幸せになればその分幸せになれる人も居る。  
見ろよ、彼女がその一人だ」

俺はそつと語りて部屋の外に居る詩音を指差す。

「それに彼女だけじゃない。

お前の仲間も、お前の妹も、

お前が幸せになることを望んでいるんだ」

「……」

「だからな……悟史」

俺はそつと語りながら悟史の肩に手を置きそつと語った。

「いい加減、自分を許してやれよ

……

「ひーそつだね……僕が幸せになることで誰かが幸せになるのなら  
まず自分を許さないとね……」

「ああそつや、ああ、この部屋から出よ。

お前の部屋はもうこんな所じゃなくて。

少しすればお前の妹と会える筈だぜ」

俺はそつと語りながら悟史を連れて部屋の外に出た。

その後の事だけど……悟史の症状は安定し普通の生活をして良いらしい。

今日は診療所で検査漬けで診療所に泊るらしい。

詩音が『今日はここで寝ます!』とか言つて悟史の病室で横になつた時は驚いた。

話を戻すと悟史は明日には退院して学校にも行けるらしい。

因みに俺は……家でものすごく羽入に怒られた。  
『なんて危険なことをしたんですか！』とか  
『あなたは馬鹿ですか！』とか色々言われた。  
まあ、何とか説得して許してもらつた。  
さて、明日は園崎家にでも行きますかな……

## 十一話 姉妹の再会

六月九日

学校が終わり俺は皆を連れて沙都子の家の前に来ている。  
梨花と沙都子の方の家じゃない。

北条家の家の前だ。

沙都子や悟史にとつては辛い思い出がある場所。

羽入以外の皆は『沙都子にとつてはここは辛い場所なのになんでここに連れて来たんだ』

と言つ目で俺を睨んでいる。

まあ、この顔もすぐに笑顔に変わる訳だが。

「あら～皆さんもう来てたんですか？早いですね」

「来たか……」

悟史を迎えて行つていた詩音がやつてきた。  
後ろには入江と

「にいーにいー……？」

そう、沙都子の兄、北条悟史が立つていた。  
沙都子の顔がみるみる内に涙顔になつていく。  
そして我慢できなくなつたのか悟史に向かつて抱き付いた。

「にいーにいー！にいーにいー！」

沙都子は泣いた。

今まで我慢していた分を。

沙都子は今までずっと待っていたのだ。

悟史が帰つて来ると信じて……

帰つてきたら普通の生活を悟史と送ろう。

朝起こして朝食を作つて……そんな普通の生活を送るのが沙都子の夢だつた。

その夢を叶える為に沙都子は信じて今まで待つていた。  
そして、その沙都子の願いは今、叶えられる。  
二人の兄妹の意思によつて。

「沙都子……これからはずつと一緒にだよ……」

悟史はそう言つて沙都子を抱きしめる。

そうだこれで良い……

二人は幸せな生活を送つていれば良い。  
二人にはその権利があるのだから。

「陸さん、あなたはすごいですね。

難見沢症候群を患者と話すだけで治すとは……」

入江は誰にも聞こえないようにそう言つて來た。  
入江は今まで苦労してきたり。

生体解剖等の非人道的なこともやつてきた。  
でもそれを裁くことは出来ないだろ。

それは彼の人を救いたいという気持ちから行つてきたのだから。

「大したことはしていませんよ。

家族・友人の合いや患者本人の情熱を呼び起こす刺激が  
医者の客観的な死んだんをはるか覆すこともありますから」

「確かに、それは実際にあり得ることです。

脳に関わる臨床ではしばしば起こるれっきとした事実ですから。

ですが、それを起こせるだけでもかなりすごいことだと思います。

私は彼女達と自分の境遇を重ねていました」

そう言って入江は語りだした。

かつて自分の父親が脳に疾患を受けとても仲の良かつた母親に暴力を振ったこと。

父親が死んだあとその母親は父親と同じ墓に入れないので欲しいと涙を流しながら訴えたこと。

自分に力があつたならば一人の仲を元に戻せたのではないかと後悔したこと。

それが切欠で神経外科の道を進んだが精神外科はこの世から抹殺され絶望していた頃に離見沢症候群の研究の依頼がありそれを引き受けたこと等を話してくれた。

「離見沢症候群は脳の病気です。

それの所為である三人は苦しんでいた……

私は三人を救おうとしていましたが研究は最近暗礁に乗り上げてしまい最近絶望していました。

それをあなたは救ってくれた……一人の人間として礼を言います。ありがとうございます……」

入江はそう言って頭を下げる。

そこまで深く礼を言わると何だかちょっとくすぐったい。

それに……

「まだまだですよ。

この村にはまだ『北条家に関わるな』と言う園崎家の号令があります。

私はその号令を解かなくてはいけません。  
彼女達を救う為にも……」

「強いですね……私はそこまで強くなれません

そう言つて入江は俯いてしまつ。

そんなことは無いのに……

「あなたは諦め無かつたじゃないですか」

「え？」

「あなたは今まであの三人を救おうと諦めなかつた。  
一度もね。そんな人は弱くありません。  
とても強い人です。

あなたのことを弱い奴だなんて言える人は居ませんよ」

俺はそう言つてその場から歩き始める。  
それを見て入江は俺を呼びとめる。

「どこに行くんですか？」

「無論、園崎家です。

やるけどありますから

「やつですか……頑張つてくださいね

俺はその言葉に後ろ手を振つて答えた。

## 十三話 陸と海の話（前書き）

すこません…… 今回は短いです。

## 十二話 陸とお轟との話

俺は今、園崎家の頭首の間に来て居る。  
本当ならば事前に色々話を通すべきだったのだろうが  
その必要は無いと判断した為すぐにここに来た。

「で、何の話だい？」

そう尋ねて来たのは園崎茜。

園崎組の二〇・二の葛西さえも従えていると噂の女。

「北条家の件ですよ。北条悟史が帰つて来たから丁度良い時期と思  
いまして」

「……どいつの意味だい？」

あくまでしらを切り通すつもりか……  
まあ、そんなことはさせないけどな。

「あなた達も北条家の件はどうにかしたいと思つて居るんだじょう  
？」

かつて園崎家は『北条家に関わるな』 そう命ぜられた。そこから北条家の差別が始まった。

最初は園崎家もそこまで酷くするつもりは無かったのだろう。  
だが、園崎家の影響力はこの村の中では大き過ぎた。  
徹底的に差別をしなければ次は自分かもしれない。

そんな恐怖心から園崎家の予想以上に北条家を差別してしまった。  
更に、古手家がダム戦争の時に消極的でリーダー失格だと言われて

いたことから

夕力派を演じ離見沢死守同盟を導いていた園崎家は自分達から人が離れることを恐れて号令を解除できない。

「全部お見通しつて訳かい。

でも、あんた、どうやって私達に号令を解除せらるつもりだい？」

「こゝの場では無理でしょ。

あなた達も号令を解く切欠を求めているんでしょう？  
その切欠が『たつた一人の少年に殴りこみをかけられた』なんでもんじゃ嫌でしょ。

私はもう既に脚本を用意します。

今からその脚本の内容を言いましょ。

「話しな

俺は茜さんにそつ言われて話し始める。

沙都子を救う為に俺が用意した脚本の内容を……

「すゞいね……本当にそれが出来るのかい？」

「大したことじゃありませんから必ず出来ます。  
お龜さん、こゝの脚本でよろしいでしょつか？」

俺は上座に居るお龜さんに話かける。

お龜さんは少し思案顔になつてこゝに答えた。

「別に良いんね。上手くこゝを運びな

「了解しました。今日はここで失礼します」

俺はそう答えて頭首の間から出た。

だけど俺は羽入から説明されていたある男の存在を忘れていた。  
物事は完璧に進まないと呟つことを……

## 十四話 帰つて来た一時の平和

六月十日

悟史が帰つて來た翌日。

学校の朝のホームルームで悟史が帰つて來たと知恵先生が皆に知らせた。

皆喜び悟史の周りに集まつてゐる。

悟史は圭一が來る前は皆の兄貴役だったらしい。皆兄貴が帰つて來たことを喜んでゐるんだろう。

「本当に良かつたな、悟史」

俺はそう言つて悟史の肩に手を置く。

悟史は本当に嬉しそうな顔でこいつ返した。

「陸君のおかげだよ」

皆に言われるが俺は本当は大したことはしていない。

ただ、俺は俺の意思に従い行動しているだけだ。

皆に褒められる様なことはしてない。

「といひで悟史、退院したばかりだがお前部活は出来るのか?」

「激しい運動はまだ駄目だつて。でも、トランプ位なり出来るんじやないかな」

悟史がそう言つた瞬間魅音の目が光つた。

……魅音の悪い癖が始まつたか。

「なら、今日の部活はトランプにしようつか～」

そう言いながら魅音は黒い笑みを浮かべる。

悟史を罰ゲームに叩き落す気なんだろう。

まずは俺に勝つ努力をするべきだと思つんだが……それは言わないでおこしてやるつ。

「咲さん！嬉しいのは分かりますが授業を始めますよー。」

知恵先生がそう言って授業が始まった。

部活

「あがりだ

そう言ってカードを置く。

今日の部活は大貧民。

え？ イカサマを使つたか？

それは想像に任せると。

ふつ……

「ああー咲ー罰ゲームの巫女服を着てもらおうつかー！」

「「「あやあああああつー」「」」

こんな素晴らしい日常こそ俺達が望む物だ。  
どうか……こんな日常が続きますように……

興富

「つたく……律子はどこ行つたんね……」

男はそう言いながら近くにあつた「ミニ箱を蹴つた。  
周りの人々がそれを見ているが男はあまり気にしていない。

「つたく……こつなつたら『あいつ』んとこ行くしか無いんね」

そう言つて男はゆっくりと歩き出した。

途中、男のスクーターの免許書が落ちたが誰も拾わない。  
男は途中で気付きそれを拾う。  
そこにはこう書いてあつた。

『北条鉄平』と……

運命は動き始めた。

## 十四話 帰つて来た一時の平和（後書き）

短いですね～……次回からちゃんとします。  
では、また今度～

## 十五話 崩れ去つた平和

六月十一日

今日は土曜日、その為学校は休みだ。  
俺は羽入を連れてデートに出かけていた。

「羽入、次はどこに行きたい？」

「え、あの、えっと……甘い物が食べたいのです……／＼／＼

羽入は顔を赤らめながらそう答えた。

ふふつ……計画通りだ。

「分かった、それじゃあ、エンジエルモートに行こうか

「あう……／＼／＼

羽入の『あう』は肯定だ。

それが俺達の間での暗黙の了解。

おっと、それより何で羽入が顔を赤らめているのかを説明しよう。  
実は俺達は手を繋いでるのだ！  
これが妻が居る男の特権だ！

「陸……恥ずかしいのです……／＼／＼

やばい……やばいよ、皆。

俺は羽入の上目遣いをくらつて萌死ぬかもしれないよ。  
誰か救急車を呼んでくれないか？

……こ、や、やひぱり良こ！  
この程度……俺は乗り切る！

「はははっ、ならもうひみつひとつひいてるか」

「あひ……／＼／＼」

皆、救急車は良いから輸血を用意してくれないか？  
鼻血がもう出る寸前なんだ。

「陸、もうHONJYUモートの前だからそろそろ離して欲しいの  
す」

羽入にそう言われて考える。

もしかしたら魅音か詩音がバイトをしているかも知れない。  
そうしたら月曜日にからかわれる。

部活でその恨みを返してやっても良いが羽入が恥ずかしい思いをし  
てしまつ。

「分かった、離すよ」

「あ……」

俺が手を離すと羽入が惜しそうに俺の手を見る。

何だかんだ言つてやつぱりもつと手を繋いでいて欲しかったんだろ  
う。

全く素直じゃないんだから。

「ま、入りづか」

俺は羽入の前に出て羽入を先導する。

羽入はその先導に従い着いてくる。

すると向うから見慣れたふたつの影が走つて来た。

「羽入、梨花と悟史が来てるよ」

「あつ？」

俺にそう言われて羽入は首を傾げて俺が指した方を見る。

「あ、本当なのです」

やはり俺の見間違いじゃないらしい。

でも、何だろう？

何か……嫌な予感がする……

「羽入、こっちからも近づいづ

「分かつたのです」

俺は羽入を抱えて梨花に向かつて走る。

お互いの顔を確認した瞬間梨花は俺と羽入の名前を呼んだ。

「「陸！羽入！」」

俺達の名前を呼んだ梨花の顔は必死な顔だった。  
まるで……親友に命の危機が近づいて来ている様な。

「梨花どうしたんだ？」

俺は羽入を降ろしながら梨花に尋ねる。  
梨花は息を整えながらこう言つた。

「沙都子が帰つて来ないの！何か嫌な予感がするの！一緒に沙都子とを探して！」

その言葉を聞いて俺は羽入を担ぎ走り出した。  
それを見て悟史も梨花を担いで走り出す。

「悟史！まずは北条家から行こう！」

最初、悟史と沙都子が北条家で住むと話が上がつていたが  
沙都子と悟史がそれを拒否して一人は梨花の家に住んでいる為に北  
条家は

今は只の空き家になつてゐる。

もし、羽入から聞いた話では沙都子が北条家に居たらアウトらしい。  
こう言つう場合最悪な目から潰していくのが一番良い選択だ。

「分かった！」

悟史はそういう言ひながら俺に着いてくる。

しかし……こんな緊迫した状況で思つことじやないが何で悟史は全  
力の俺に着いてこれるんだ？  
俺の全力は時速二十キロだぞ？

そんなことを思いながら俺は沙都子の家に向かつて全力で走つた。

しばらく走って北条家に着いた。

梨花は沙都子がここに居ない様にと両手を合わせて祈っている。

悟史は緊張した面持ちで家を見ている。

俺は羽入に目で悟史を隠すようにに催促する。

羽入が悟史を隠したのを見て皆の代わりに北条家のインターホンを押した。

ピンポーン

そんな音がして誰かが玄関に近づく音が聞こえる。

そして、玄関が開く。

「誰じやい？」

如何にも柄の悪い男が出てきた。

「私は、沙都子さんの親友の古代陸と申します。  
沙都子さんと遊ぶ約束をしていたのですが……」

俺はそう言しながら中を確認しようとすると男はそれを遮る様にこう答えた。

「沙都子は風邪じやー！」

男はそつと扉を閉めた。

バンッ！

そんな音が鳴ったと思うと悟史がゆっくりとこちらへ歩いてくる。  
悟史の顔には怒りが込められ拳は握り締められている。

「悟史、何をする気だ！」

俺は悟史の腕を掴んで悟史を止める。

「沙都子が風邪だと…？嘘をつきながら…いつまで家事を押し付けてるだけだろ！」

あいつを殺してやる！あいつを殺して沙都子を救つてやる…」

悟史はそう言いながら俺の手を振り払おうとする。

だが、俺は絶対にその手を離さない。

もし、離したら沙都子は自分の所為で悟史が人を殺したと自分を責めてしまつ。

そんなことだけは絶対に避けなくてはならない。

「悟史…お前があいつを殺せば沙都子が傷付く…  
…は耐えるんだ！絶対に俺が沙都子を救うから…  
…は耐えてくれ！」

無意識に悟史を抑えている手に力を入れてしまつ。

俺だつて出来ることならばこの手を離して悟史と一緒にあの男を殺してやりたい。

だけどそれを沙都子は絶対に望まない。  
だから俺はこの手を離さない。

「俺達が出来るのは沙都子を救つ為の最善手を考えてその最善手を取ることだ。

絶対に殺したいって言つ感情は出すな。抑えるんだ…」

「陸…分かったよ。今は耐える

俺はその言葉を聞いて悟史を抑えている手を離した。

既に悟史の顔に怒りは無い。

拳も握り締められて無い。

その顔は沙都子を救うと叫ぶ意思を決めた顔だ。

「悟史、お前は今まで通り梨花の家に住め。  
明日皆と今日のことを相談しよう。良いな?」

「ああ」

悟史がそう返事をしてその場で今日は解散になつた。  
俺は北条家を見ながら心の中でこゝつ咳いた。

『北条鉄平、俺を敵に回したことを後悔しやがれ……！』

俺は知らない内に自分の拳を握り締めていた。

## 十六話 沙都子を救う為の作戦

六月十一日

「と言つて皆で集まつてもらひた」

沙都子が鉄平に連れ去られた翌日俺は自分の家に部活メンバーを集めていた。

俺が事情を話している間皆の顔には怒りの表情が浮かんでいた。特に詩音と圭一は今すぐ鉄平を殺してもおかしくない程の殺氣を放つていて。

「沙都子を救いだす為の計画は既に立ててある。くれぐれも叔父を殺す様なことはしないでくれ」

俺がそう言つと一人は机を叩いて俺を睨みつけ言つた。  
「陸一何言つてんだよー今、こつしてゐる間にも沙都子は虐待をされてるんだぞー！」

「圭ちゃんの言つ通りですー早く沙都子を救う為には叔父を殺さないといけないんですー！」

はあ……悟史と同じ様なことを大切に思つてやがる。

まあ、それだけ沙都子のことを大切に思つてると言つことだな。

「落ち着け、良いか?

俺は今日、沙都子が叔父に連れ去られなくてもお前達をここに呼ぶ

「氣だった」

「「「は？」」「

俺の言つたことに全員首を傾げる。

さて……俺が立てていた作戦を明かそつか……

「園崎家次期頭首、園崎魅音に尋ねよう。

園崎お駄は北条家を恨んでいると思つか？」

俺のその言葉に魅音が反応するよりも早く詩音が反応した。

「恨んでるに決まってるじゃないですか！  
いつも恨んでる様な発言をしてるんですよー。」

詩音はまた机を叩いて怒鳴つた。

まあ、それがこの難見沢の住人の一般論だらう。  
だが、俺はその一般論を……否定するー！

「なら、何で沙都子はこの土地に居れたんだ？」

「それは……梨花ちゃんが保護したからじゃないんですか？」

詩音の論に俺は首を振つて彼女の論を否定しこう続けた。

「確かに、梨花が保護したからとこりともあるだろ。  
だが、両親と悟史が居なくなつてから保護するにも期間があつただ  
ろ。」

その間に沙都子を追い出せた筈だ。なのに何で追い出せなかつたん  
だ？」

「それは……鬼婆も親が消えた子をいきなり追い出す程外道じゃないからでしょ？」

俺は詩音の論に頷いて肯定する。

「そうだ、外道だつたら沙都子を追い出しだらう。外道じや無かつたら北条家に関する号令を取り消しだらう。なのに何故、どちらの選択肢も取らなかつたのか。それは両方の選択肢が取れなかつたからだ」

「「「両方の選択が取れなかつた？」」」

全員がオウム返しに聞いてきたのを俺は頷いて肯定する。そして、説明を始めた。

「元々、北条家に関する号令は『園崎家に逆らえればこいつなるぞ』と言つみせしめだつたんだ。ほとぼりが冷めれば北条家に関する号令を解くと言つ筋書きだつた。でも、この村での園崎家の影響力は大き過ぎたんだ。村人は『徹底的にやらなければ次は自分達がやられる』と言つ恐怖感を抱きやり過ぎてしまつた。

園崎家はその号令を解こうと思つてもかつて園崎家はかつてダム戦争時に古手家がダム戦争に消極的だつた為にリーダー失格と言われてきたのを思い出し『ここで号令を解けば自分達から人心が離れてしまうのではないか』言つ恐怖感を抱いてしまつた。その一つの恐怖感が村を支配し、北条家を差別している切欠になつてしまつた。俺達がやるべきなことは一つだ。

一つ曰、村人の意志を園崎家に見せつけること。二つ曰、園崎家の意思を村人に見せつけること。

その二つが出来れば沙都子を救うことが出来る」

「でも、どうやってそんなことするの？」

さつき陸君が言った通り園崎家の影響力はこの村では大きいんだよ？園崎家を恐れて協力してくれない人も出てくるかもしれないよ？」

「そんな奴でも出てくるかもしれないな。

だが、そう言う奴等を無理矢理にも協力させることが出来る権力がこっちにはあるんだ」

俺はそう言つてその権力を持つてゐる子に指を指す。  
そう、御三家一番の権力を持つてゐる一家の当主……

古手梨花を。

「知つてるか？今の権力は古手く公由く園崎だが  
だが本来の権力は公由く園崎く古手と言う式だつたんだ」

この権力の式が出来たのはかつて、古手家が出来た頃まで遡る。  
本来古手家と言う家は占いの家で村の未来を占う家だつた。  
その頃、雛見沢では羽入の一族の暴走した一派が暴れていた。（羽  
入の角はその一族の証らしい）

その一派から羽入はこの村を守つた。

その時、偶々母親が死んだ子供を発見しその時の古手家頭首に

『この子は我、オヤシロの神の血が入りし子なり、この子を大切に

育てればこの村は永久に繁栄するだろつ』

と言つて預けた。

その子が後に古手家開祖『古手桜花』の父となる俺の前世『古手陸』だった。

その後色々あり、羽入が暴走して桜花は村の為に羽入を討たなければならなくなり桜花は羽入を討つた。

その後古手は難見沢を救つた救世主の家として讃えられ公由く園崎く古手と言う式が出来た。

「それに梨花のこの村での呼び名は『オヤシロ様の生まれ変わり』だ。

オヤシロ様信仰が深いこの村でその名はお龜の一言並に重い

実際はお龜の言葉よりもはるかに思いだろつがそれではお龜に梨花が命令して終わりにしようと

言いかねないので言わない様にしておく。

じやないと色々後で面倒なことになりそつだしな。

「さて、大筋を離し始めよう。

まずは、村人に俺達が沙都子を救おうとしている意志があることを広めなくてはならない」

「じゃあ、何をするんだ?」

圭一の質問に俺は少し間を置いて

「児童相談所に訴えに行くのさ」

「うつ答えた。

## 十六話 沙都子を救つ為の作戦（後書き）

権力の式の説明がありましたがあれはゲームでの設定です。  
公式設定ではありませんのであしからず。

## 十七話 北条紗都子救出作戦始動

六月十三日

「食事の最中皆すまない！」

その日の昼食中、圭一の声が教室に響き渡った。教室内の生徒は全員何事かと圭一に視線を向ける。圭一はそれを見て話を始めた。

「今日、沙都子が休みの理由を皆知っているだろ？ うか！」

圭一の言葉を聞いて生徒全員が騒ぎ始めた。沙都子が何故休んだのかを皆話合っているのだろう。圭一は少しして話を続けた。

「皆は知っているだろ？ 北条鉄平と言つ男を！ かつて悟史と沙都子を虐待した最低の男だ！ その男が雑見沢に帰つて來たんだ！ そして、沙都子を攫つたんだ！」

「――――――」

皆が驚愕の表情を浮かべる。

今日沙都子は欠席で皆はその欠席の理由は風邪だと知らされていた。だが、北条鉄平が帰つて來たということを知らされたら風邪だと言うことを信じる者はこのクラスの中には居ない。間違いなく虐待されていると思うだろ？

「良いか！俺達はこれから児童相談所に行く！」

だが！たつた七人ではただ『同級生七名が陳情に来た』としか記録されないだろう！分かるか！

七人だけでは駄目なんだ！

だから……お前等も沙都子を救つ為に力を貸してくれ！」

圭一がそう言つと部活メンバーが頭を下げる。  
そして少しして

「分かりました！僕も力を貸します！」

「僕も！」

「私も！」

クラスの全員が立ち上がり俺達に力を貸す決心を決めてくれた。  
これで……計画の第一段階の準備が終了した。

「お前等！離見沢魂見せてやるつぜー！」

「「「「うおおおおおつー」」」

圭一がそう言つてクラス全員を焚き付ける。

するとその騒ぎを聞き付けた知恵先生が教室に入つて來た。

「前原君ーこの騒ぎは何ですか！生徒には小さい子も居るんです！  
問題を起こさないでくださいー！」

教師らしい言葉だな。

まあ、普通はそう言つだろ？

「知恵先生、これを問題行為だと思いますか？」

俺がそう尋ねると先生はそれを肯定した。

「当たり前です！」

「なら、あなたは仲間を救う行為が問題行為だと思つと。そう言つことですね？」

「……うー。」

「見えても俺は『口先の妖術使い』だと羽入に言われて来たんだ。口で負ける様なことは絶対にない。」

「見てください。仲間を救おうと必死に頑張つている彼等の姿を。そんな彼等を止めるんですか？」

「問題を起こすなど、彼等を束縛するんですか？」

「そんな権利は誰にもありません。」

「私にも、あなたにも、園崎家にも、公由家にも、古手家にも、勿論オヤシロ様にも……」

「仲間を助ける為に協力してください」とは言いません。邪魔をしないでください」

俺はそう言つて頭を下げる。

すると肩に手を置かれた感触があつたから頭を上げてみるとそこには校長先生が居た。

「古代君、我等は邪魔をしない。」

「何かあればこの不祥海江田が全ての責任を取るつー。」

校長先生はそう言つて胸を叩く。

知恵先生も説得を諦めたのかため息を一つついてこいつ言った。

「分かりました、今日は先生が引率します！  
皆さんちゃんとルールに従つてくださいね！」

「「「はい！」」」

そして俺達は児童相談所に乗り込むことになった。

だが……沙都子を救う為とは言え皆を騙しているのは心が痛むな……

⋮

## 十七話 北条紗都子救出作戦始動（後書き）

すいません、急いで書いたので駄文になってしまったかもしません。

## 十八話（前書き）

一週間も間を空けてしまいました。  
反省しております。  
申し訳ありません……

「くそ！何なんだよあの態度は！」

そう言つて圭一は道に転がつている石を蹴飛ばした。  
俺達は児童相談所に行つて後だつた。

陳情した結果、児童相談所の返事は『良く検討します』だった。  
分かつていてこととは言え流石に反応が冷淡過ぎる。  
圭一が怒るのも納得出来ると言つものだ。

「陸、大丈夫なの？児童相談所は全く取り合つてくれなかつたけど  
……」

魅音は心配そうな顔をしている。  
まあ、不安になるのは当然だろ？

「良いんだ。児童相談所が冷淡な反応を取るのは分かつていて。  
もう一回陳情して計画の第一段階を始める」

「第一段階？第一段階はなんのかな？かな？」

「この前に言つただろ？第一段階は村人に俺達が沙都子を救おうと  
している意志があることを広めることだ」

「それって、この一回だけじゃ駄目なのか？  
早く沙都子を救わないと……」

圭一の顔には焦りが浮かんでいる。

こいつ頭は良いのに焦り始めるところん駄目だな。

「一回だけでは気まぐれにやつたと思われてしまつ。かと言つて三回は駄目だ。

明後日は第一段階を完了させなければいけないからな

「明後日?..圭ちやん、明後日つて何かあつたけ?」

「こいつ……

園崎家次期頭首の自覚はあるのか?」

「明後日は綿流しの実行委員会の集会があるだらうが……」

「え?..そこで何するの?」

「こいつ……ちやんと帝王学院んでるのか?」

「そこでは村の重鎮が集まる。」

そこで村の重鎮達を説き伏せるんだ。

その後日は園崎家の頭首、園崎お馴を説き伏せる

「だ、大丈夫なの?..ばつちやを説き伏せるのは相当厳しいよ?..」

「大丈夫だ、昨日も言つた通り園崎お馴は北条家を恨んでいない

少しは立ち回りが必要になるかもしれないけどな。  
なんて言つたら羽入が心配するから絶対に言えない。

「明日は今日以上の数が必要になる。  
数を集めておいてくれ。」

「羽入、帰ろう」

「あ、はいなのですー。」

俺はそうして羽入と共に家に向かった。

陸の家

家に帰った後俺は電話の前に居た。  
弘輝に連絡する為だ。  
だけど……

「色々言われるんだろうな……」

あいつのことだから『また厄介事か?』とか『何か高級料理奢れよ  
ー』とか言われるんだろうな……  
はあ……あいつの厭味を聞くのはもはや慣れているとは言え憂鬱だ……

「そんなこと言つてられないか……」

俺はそつぬぎながら弘輝の番号を押していく。

ふるふるふる、ふるふるふる……

『はーい、ひかり弘輝へ』

「俺だ

『ああ、陸か。』

どうかしたか~?』

「ちよっと頼みごとがあるんだ」

『良いけど何か高級料理奢れよ~』

やつぱりかよ.....

「ああ、分かったよ。

それで頼みごとなんだけどな。

六月十九日までに.....」

この頼みごとが上手く行けば俺の計画は全て上手く行く。  
必ず成功させてやる!

六月十四日

児童相談所前

前日の弘輝への頼み事は思ったよりも上手く行つた。  
後は弘輝が俺の頼みごとを実行してくれるだけだ。

「ところでお前等、ちゃんと人は集めたか?」

「うん、上手く行つたよ。

特に圭ちゃんと詩音がね」

「成程、だからエンジエルモートで見たことがある奴等が居るのか

今日参加した面子を見ると約一週間にエンジエルモートで見た様な奴等が居た。

と言つたか前にテレビで見た有名な野球選手が居るんだがいつの間に知り合いになつたんだ？

「おーーそろそろ入るつぜー！」

圭一のその言葉で皆が児童相談所に入つて行つた。  
その途中俺は見た

「あいつは……！」

俺の親の仇……

富竹ジロウを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0712y/>

---

ひぐらしのなく頃に～皆守り編～

2011年12月27日19時51分発行